

を生じ、一部は膨れ上がり、剝落をも伴って当初の表現を損ねていたため、その腐蝕部を全て除去した。その結果、面相及び頸部のほぼ全体と両手・足先のかなりの部分は、制作当初の金箔ないしは黒漆塗をあらわすことが出来た。軀部の半ば以下に甚しかった金箔の剝離、面相部左側と右肩正背面等の矧目に沿った下地の浮き上り、頭部群青彩の風化、浮き上り等は、水性アクリル樹脂「バインダー17」及びアクリル樹脂エマルジョン「プライマルAC344」で剝落止めを行った。金箔の剝落した箇所は、現状のまま補足しなかったが、不自然な印象を与える両耳前の鏝痕、腹部下方の後補金泥塗を除去した痕、右袖外側の割損部は漆箔を施し、古色仕上げとした。

なお、納入品は保存状態が良好なため補修せず、調査確認の後、原形に復し、事業者の意向により再び像内に納入した。

(中村康)

木造孔雀明王坐像

一 軀

和歌山県 金剛峯寺

指定年月日 重要文化財(明治四十一年一月十日)

修理年度 昭和六十一年度

補助事業者 財団法人高野山文化財保存会(伊都郡高野町高野山)

修理施行者 財団法人美術院

正治二年(二二〇〇)十一月に東寺長者延杲が後鳥羽上皇の祈願所として高野山に建立した孔雀堂の本尊である。両脚部裏の「巧匠ア(梵字)阿弥陀佛快慶」の銘は後世書き改められたものであるが、何よりも四臂をあらわす形姿の自然で均整のとれた構成に、快慶の最も充実した時期の特色がうかがえよう。彩色は焼けてはいるが面相部と腕の一部が剝落するのみで、截金文様や銅製の宝冠、腕・臂釧を造像時のまま残すことも貴重である。

本軀は、大正十二年に頭軀幹部の内側を除いた各矧目の解軀修理が行われ、明治期に面相部、首柄等の矧目が緊結されているため、今回の修理は剝落止めを主体とするものとなったが、面相部は、明治の修理の際に、彩色が剝落した箇所には厚く鏝漆が盛り付けられたうえ、ほぼ全面に胡粉を下地とする補彩が施され、それが彩色の残る表面を覆い隠すのみならずモデリングまでをも変えていることが修理の過程で判明したので、可能な限り除去することにより、ほぼ当初の面貌表現を取り戻した。台座は不安定な構造を補強し、近世の泥地漆箔の剝落、浮き上りも、損傷拡大のおそれがあるため補

修した。

形状

本鉢 高髻。宝冠をつけ、頭髮は毛筋彫とする。胸飾及び瓔珞(各後補)をつけ、条帛を懸ける。四臂の各肘を屈し、左第一手は胸前で掌を仰ぎ、第二手は肩の側方で拳を立て、右第一手は膝上で拳を立て、第二手は肩の側方で掌を仰げる。いずれも持物(各後補)を執る。各腕・臂釧をつける。裳をつけ、腰布を腹前で結び、右足を外に結跏趺坐する。

台座 蓮華・孔雀及び框座(孔雀の頭鉢部、両翼、反花、上框一段の他後補)

法量 単位 cm

本鉢 像高	七七・八 (二尺五寸六分)
頂一顎	三四・六 髻高
髮際一顎	一三・六 面幅
耳張	一六・六 面奥
胸奥	一九・〇 腹奥
臂張(第一手)	四五・五 同(第二手)
台座 全高(尾羽頂一)	二二九・七 同(蓮肉上面一)
孔雀高	一一五・三 同最大幅
反花径	六〇・〇 同厚
上框幅	七六・〇 同厚

構造

本鉢 桧材。寄木造。彩色・截金文様。玉眼嵌入。白毫水晶製。宝冠、腕・臂釧、各金銅製。

頭鉢幹部は、両耳上及び鉢側後寄りで前後に矧ぐ二材(各幅二・五cm、前半材奥一二・五cm、後半材奥一九・二cm、各正・背面を柁目とする)から彫成する。これに面相部の一材(正面板目)、両腰脇の各一材、両脚部一材を矧付ける。材を厚手に残す内削りを施し、頭鉢幹部材は頸付根の下方で首柄を割矧ぐ。四臂は各肩、肘、手首で矧ぎ、髻、正・背面の条帛垂下部、裳先(後補)の各一材を矧付ける。

表面は、剥落箇所を見る限りでは、地の粉錆を衣部にはやや厚く盛り付け、肉身部は腕などの目止め程度に施す。さらに全面黒漆塗としたうえ、肉身部は直接肉色を塗り、衣部は白色を下地とする彩色を施す。

内削り面は、頸部以下を墨塗(後補)とし、その矧目にのみ布貼漆塗(後補)を施し、両脚部裏に「巧匠アン(梵字)阿弥陀佛快慶」の朱漆銘(後補)を記す。内視鏡によれば、頭部は下方の一部を除いて素地とし、頭頂から額、後頭部にかけて孔雀明王種子九字、玉眼押えの下方から縦に「南無阿」の各墨書があり、後者の四字目以下は後補の墨塗によって消されている。玉眼の押え木は竹釘で止め、木屎漆で塗り固めている。

台座 桧材。漆箔・彩色(後補)。
孔雀本鉢 大略一材製。心棒受の部分を残し、内削りを施す。
両翼 構造不詳。
反花 四材矧寄(一部後補)。
上框 四材矧寄。

修理の概要

本躰

面相部のほぼ全体を覆っていた胡粉を下地とする補彩は、当初の彩色が剥落した白毫周辺、額の両角から両眼尻にかけて、両瞼の張出た部分、鼻先、両頬の上部、顎先に錆漆を盛り付けてその周縁を胡粉で埋め、面相部の矧目を両頬の下部から洋釘を打って緊結し、その痕を錆漆で埋めた修理の際に、修理箇所を整えるために施されたものであった。今回、この胡粉彩色の風化して浮上っていた髪際から顎先及び両頬半ばにかけてを取り除き、額の髪際に沿う部分、左右のこめかみ、両眉から眼窩にかけて、両眼及び鼻の輪郭を含む周縁部、唇とその周辺など、下層に隠されていた当初の表面をあらわした。当初の表面が剥落した箇所を充填されていた錆漆は、一段高く盛上り、本来のモデリングを損っていると判断されたため、これを除去したところ良好な状態で保存された彫刻面があらわれたので、周囲に残された当初の表面を根拠として控えめに錆漆下地を施し、現状に合わせて補彩を行った。躰部においては、表面及び内矧り面の矧目に沿って施された修理時の補彩が変色していたので、これを修整した。

当初の彩色は、風化が進行しているため、水溶性アクリル樹脂「バインダー17」を全体に素地まで浸透させて硬化したうえ、面相部や腕部の剥落箇所周辺をはじめ、背面の条帛垂下部、胸・腹部及び肩背面などの一部に生じた浮き上りを、アクリル樹脂エマルジョン「ブライマルAC344」で接着した。

躰幹部の正・背面は共に柾目から彫出されているために、条帛の

縁や襲、裳の折返しなどに、割損による小欠失が多く認められたが、正面にあって視線を誘う右腹部に懸る条帛の上縁部のみ、木屎漆で成形して補彩を施した。他は現状のままとした。ただ、白色下地や錆地の白く浮き出てみえる部分は、腕部の剥落箇所のそれと共に古色をつけ、目立たぬようにした。また左腿部外側の割れて開いた部分を麦漆及び木屎漆で接合した。

飾金具は一旦取り外し、宝冠及び垂飾の腐蝕した銅線を取り換えた。

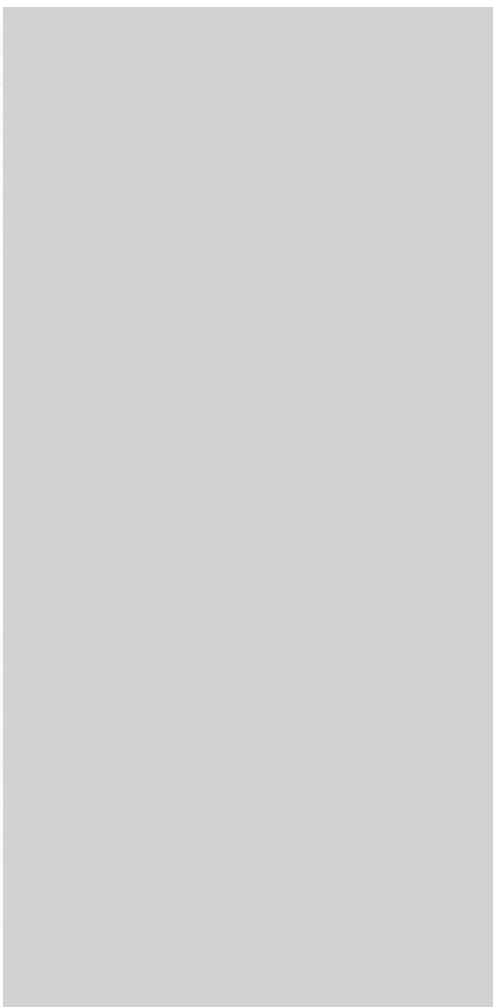
台座

蓮華座を安定した状態で固定するよう、蓮華の受座と孔雀の懸布を支える台木に、それぞれ心棒を通す丸孔を穿った部材を補足して嵌め込んだ。また強度に不安のあった框の各段に中枠を補足し、その中・下段分に孔雀の足柄を通す柄孔を設け、反花の中央部にも柄孔をあけた嵌板を入れて上段分の中枠に固定することにより、足下の受座より下方に足柄孔がなかった孔雀の安定をはかった。この他、両翼と尾羽の接合部の緩みを修整し、廻足に隅木及び隅足を補足した。

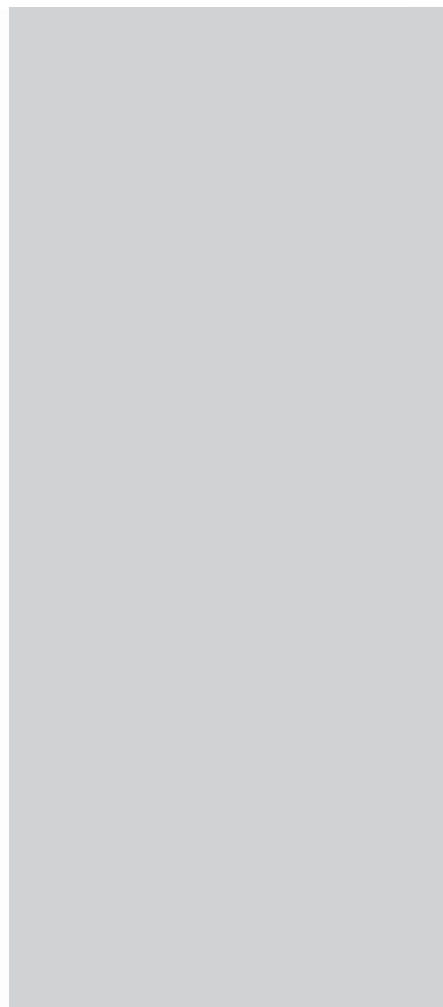
框各段の緩んだ矧目は麦漆を注入して接着した。虫蝕部はアクリル樹脂「パラロイドB72」で硬化し、木屎漆を充填した。

近世及びそれ以降の漆箔の剥落、浮き上りは、そのままでは見苦しく、損傷拡大のおそれもあるため、浮き上りは本躰と同様の方法で剥落止めを行い、剥落箇所は新たに漆箔を施して古色仕上げとした。

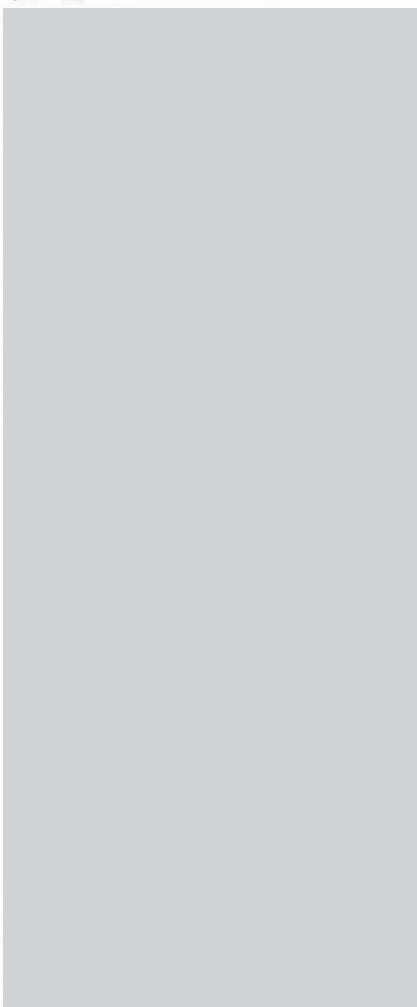
(中村康)



完 成



修理前

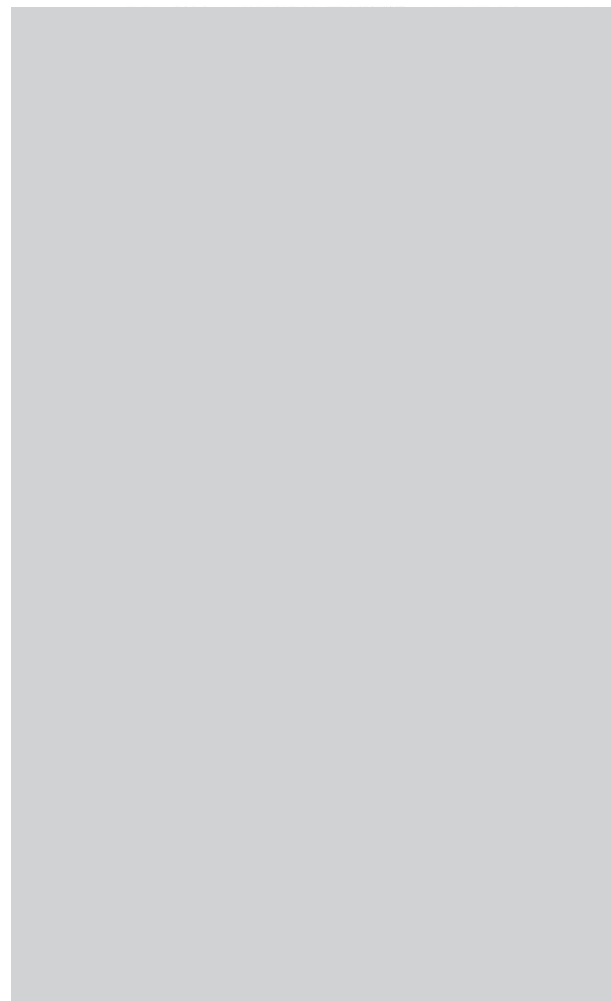


完 成

阿弥陀如来立像 八葉蓮華寺

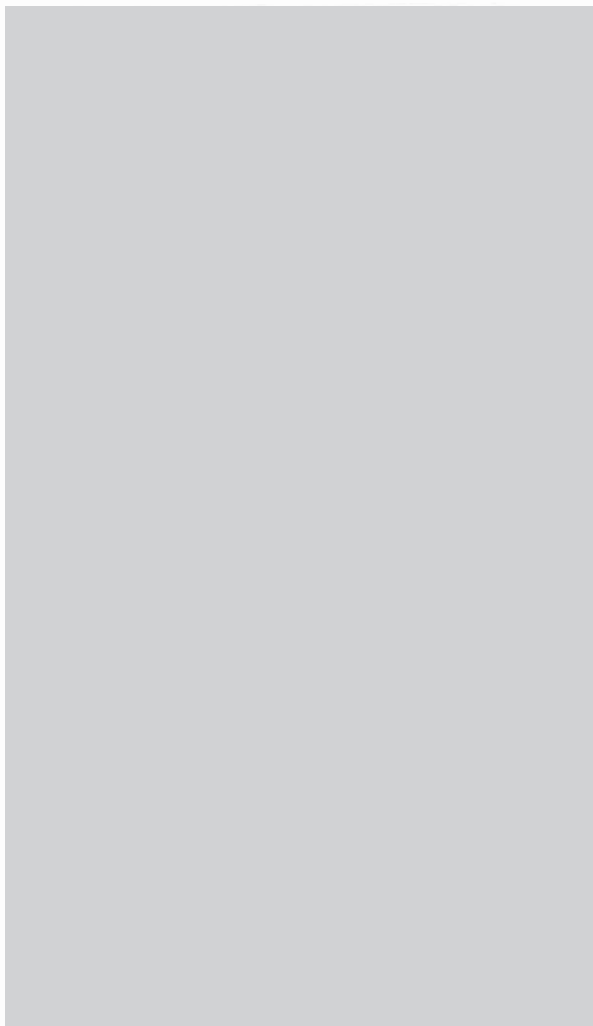


解体状況

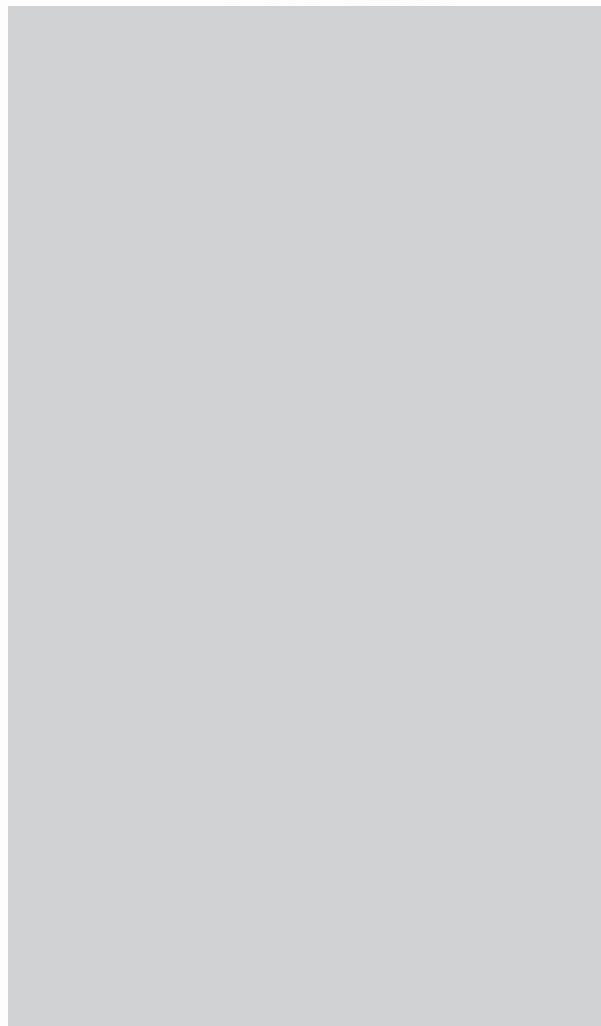


銘文および納入品

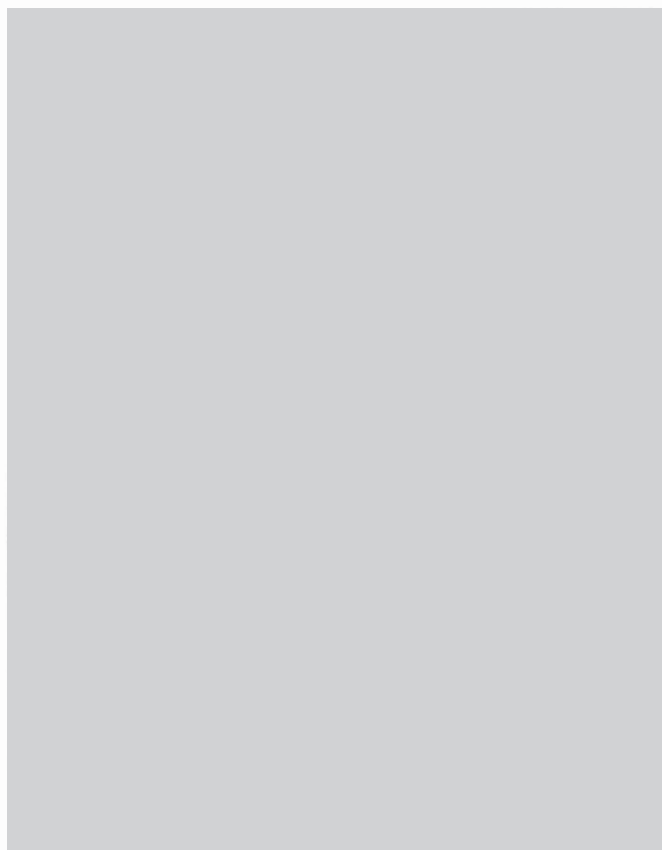
阿弥陀如来立像 八葉蓮華寺



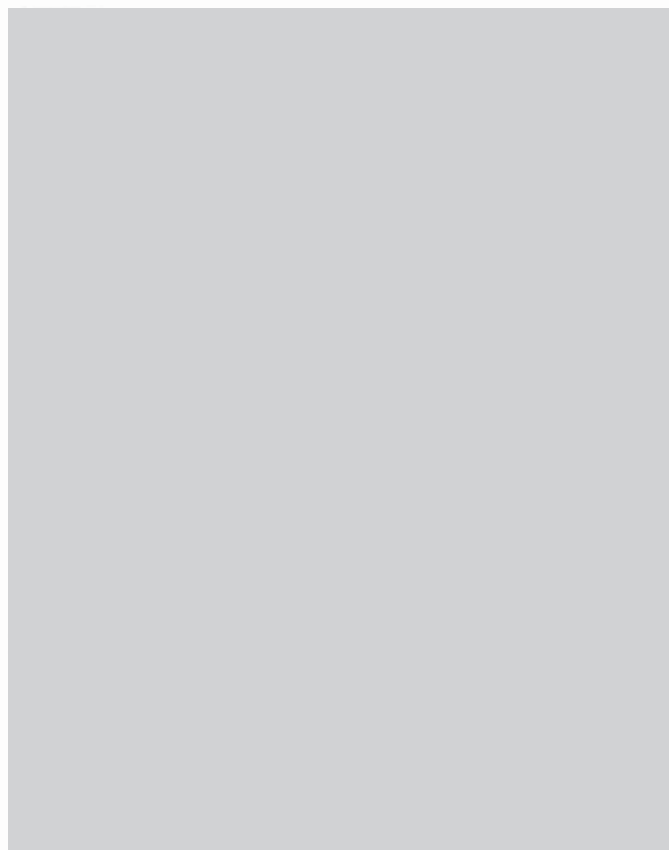
完 成



修理前

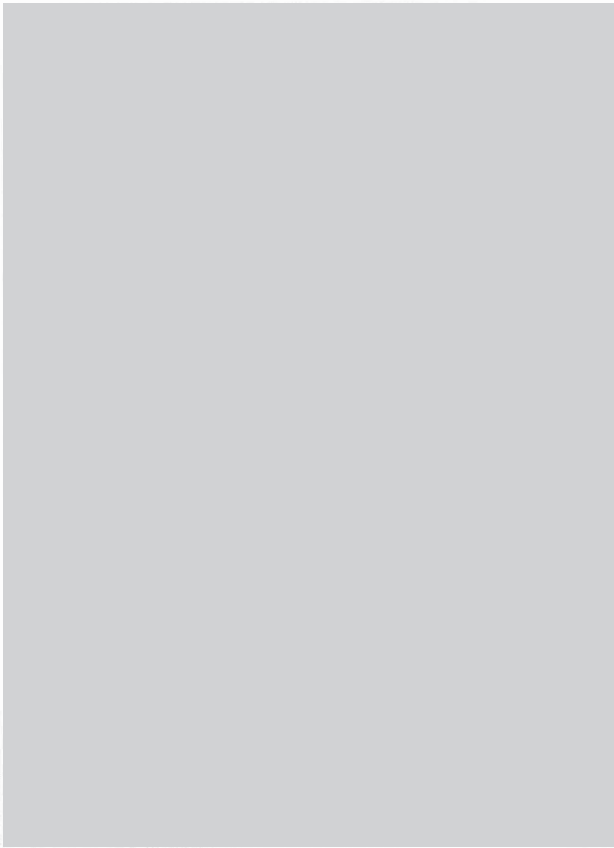


完 成

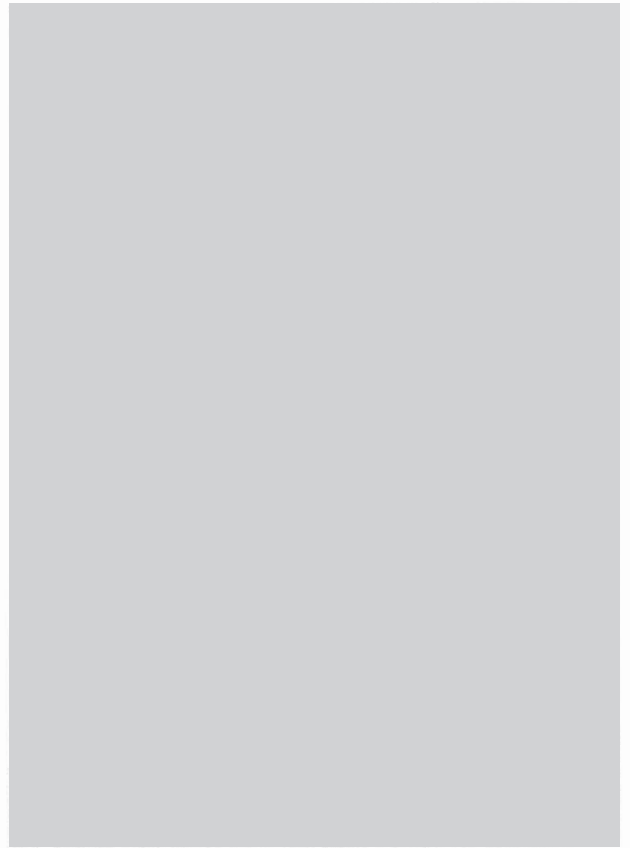


修理前

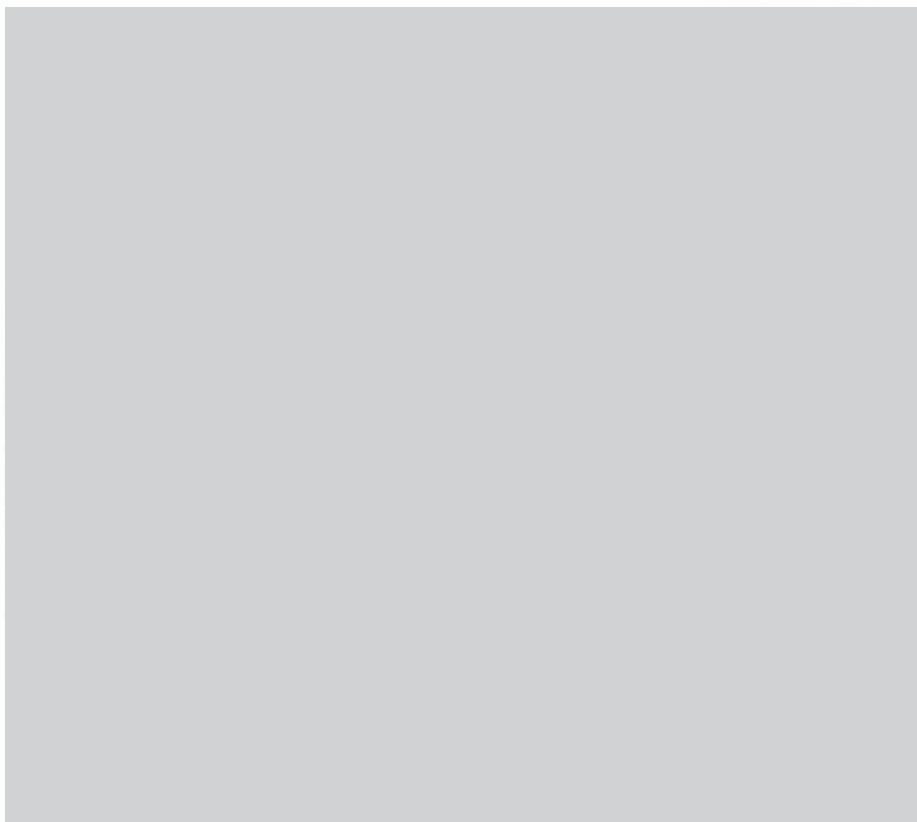
孔雀明王坐像 金剛峯寺



顔面 完成



顔面 修理前



像底 完成

孔雀明王坐像 金剛峯寺